

蓼太詠「高き名の」狂歌と南畝撰「蓼太集序」をめぐる

久保田 改一

はじめに

近世文学の分野で、特定の作者の全集が編まれているものはどれくらいあるだろうか。未完のもの、ごく最近刊行され始めたものも含めて挙げてみると、宗因、芭蕉、西鶴、近松、秋成、南畝、京伝、蕪村、綾足、一茶、南北あたりがたちどころに思い浮かぶ。では、全集が完備して以降、その作者を対象とする研究は飛躍的に発展したといえるだろうか、近現代文学の分野であれば、全集が出来て初めて研究対象として認知されたような印象を持つが、同じ事が近世文学の分野でいえるだろうか、と自問してみると、否という答えしか出て来ない。近世文学の研究では、全集の編集につながるかどうかは別として、まずは資料の掘り起こしと位置づけに全力が注がれ、伝記研究、文壇研究、年表・書目の作成といった方面で業績の蓄積がはかられるのが通常である。幸いにして全集が企画されると、それまで業績を積み上げてきた研究者達が鳩首協議し、その時点でもっとも良心的な資料集を作成すべく努力する。そうして全集が完成

したときには、第一線の研究者達はこれまでの研究のすべてを出し切って、もうやる事がなくなってしまう。あとは後進に道を譲るといった感じさえ漂うことがある。それではなんのための全集編纂かと思うのであるが、おおむねそのような経緯で、全集完成後の研究はなかなか進まない。つまり、近世文学研究は、極言すれば全集を作るまでの研究に終始していて、全集に基づいて研究を発表するのを潔しとしないところがある。たまに誰かが全集を利用して何かものを言うと、全集で公になっている事を材料にして今更何の意味があるのかといわんばかりの冷笑が、無視という形で湧き出してくる。

新資料の発掘が、無数に資料の多い近世文学の分野では重要であることはもちろん承知している。しかし、公刊されて共有の財産となった資料でも、隅から隅まで精読されて疑問の余地もないほど理解されているかと言えば、決してそんなことはない。詳細な注釈が施されているものでも、研究の進展によって新たな読みが提示される可能性は十分にある。まして近世文学の作品や資料の大半は未注釈のまま放置されている。具体的な読みが提示されていない場合、また先行研究が不十分で偏った読みしかなされておらず、しかもそれが大手を振って横行している場合、本文そのものはありふれていても、読みの進展を確実にするような研究が生まれれば、それは新資料の発掘と比肩されるほどに重要な新知見を示すことになるのではないか。ところが、学会の趨勢が資料重視に傾く分、読みの再考

を促す研究が十分な評価を得にくいのは確かで、いきおい若手の研究者は資料偏重の姿勢を益々強め、読まれない文献の山は日増しに高くなっているようである。作品を読まない文学研究などあり得ないのにと思わずにはいられない。

このような状況に異を唱えるつもりもあつて、本誌創刊号に寄稿するに当たり、公刊された資料をもとに、近世中期の江戸を代表する俳諧宗匠大島蓼太と、文人・戯作者として頭角を現しつつあつた大田南畝の二人が、時と場を共有しつつ生み出した表現の奥にあるものをあれこれ考えてみたいと思つた。本論には新資料は何一つない。実証の困難な推測をあれこれ述べることになるが、作品をどう読むかという問題を私なりに実践した報告として読んで頂ければと思う。

一

予が牛込にありし時、此蓼太、清水の藩の矢田貝左伝次といへるものを介として、酒一陶をたづさへ来りて、
高き名のひゞきは四方にわき出て赤らくと子どもまでしる
といへる狂歌を持来れり。其後深川要津寺に毎月蓮花会といへる会ありしが、招かれてゆきしに、一席禁酒なれども、ひそかに蓮社の禁をゆるして、酒などすゝめたりき。

蓼太が南畝の名声を称揚した狂歌として夙に著名である。出典は

『奴風』（新日本古典文学大系『寝惚先生文集 狂歌才藏集 四方のあか』岩波書店、一九九三年。以下、「新大系」と略す）四四五頁。この狂歌をどう意味づけるかについて、まず故浜田義一郎氏『大田南畝』（吉川弘文館、一九六三年。新装版一九八六年）の見解を見る必要がある。

翌六年（安永―引用者注）には俳人大島蓼太が南畝を初めて訪ね、（狂歌略―引用者注）という狂歌を持って来た（『奴風』）とある。江戸市中では彼の頓智の狂歌は子どもにまで知られていたといふのである。蓼太は江戸の俳壇の老大家で時に六十歳、家集『蓼太句集』を出版するについて、南畝の漢文の序を依頼して来たのだから、南畝の名声がいかに高くなつていたかが知られる。（同書五九頁）

この浜田氏の説は、ほぼ疑問の余地なく継承されてきた。安永六年の時点でそれほど南畝の名声は高かつたと受け止めることに躊躇する必要はなかつたのであろう。近時、中野三敏氏が「幕臣南畝の雅と俗」（『新日本古典文学大系 月報』四五、一九九三年六月）の中で、「大田南畝は、当時大変な人気があつたようですね。」との編集部問いに対し、南畝が「狭い範囲の文芸好きのグループの中では有名人」であつたことを述べた上で、

例の大島蓼太が、南畝を訪ねて（狂歌略―引用者注）でしたか、その名声を讃えたといいますが、あれはあくまで南畝へのほめ言葉で、そのまま真に受けるわけにはいきません。あの歌でいう「子ども」というのは、文芸を楽しむ知識人の子供、すなわち一部の文学青年という意味にとつて置けばいいと思いますね。

と答えているのは、これまでの常識の見直しを迫る見解の表明といえる。

安永六年の時点で、蓼太の狂歌が示す内容が、現実の南畝の身上に起こりえたのかどうかという問題については、浜田氏の見方は無理だと考えるほかはないであろう。浜田氏自身、前掲の箇所において「しかしこの時代の狂歌は書きのこされていない。いわゆる言捨てにした狂歌が口から口へ伝えられたのであろう。」と述べている。書き残されず、もちろん公表もされていない狂歌のいくつかが「口から口へ伝えられた」としても、その情報流通の程度は高が知れている。南畝のごく身の回り、親戚や親しい知友の間でこそ可能だったと考えるのが現実的であろう。浜田説は、南畝に対する身臍肩が働いたものとして若干割り引く必要がある。

では、当の狂歌の成立事情と表現には、もう少し踏み込む余地はないのか。以下、両面から狂歌の吟味を行いたい。

今一度『奴胤』に目を向けてみる。すると、蓼太と南畝の仲介役を果たした谷田貝左伝次という人物が浮上する。この谷田貝について多少なりとも留意した言及は、少なくとも管見に入らない。ちなみに新大系の当該箇所の注には「未詳」とあるのみで、これ以上の追求は不可能かと思われる。

ところが、『大田南畝全集』（以下『全集』と略す）の別巻に収録された「索引」によって、谷田貝が米汁という俳号と樽貫熟柿という狂号を持つことが判明する。すなわち「月露草」（『全集』第十八巻所収）末尾の「附 釈名」に「米汁（亦称樽貫熟柿、称呼谷田貝左伝二―以上割注）」との記述を見ることが出来るのである。「月露草」は安永八年の南畝主催の月見宴に諸家が寄せた詩歌・文章を集めたもので、谷田貝は発句と狂歌を寄せている。谷田貝が狂歌を詠むようになったのはいつごろからなのか判然としないが、蓼太と南畝を引き合わせる前から狂歌活動を行っていたとは考えにくく、蓼太との関係から見て、まず俳諧に関心を抱いていたものと考えてよさそうである。

その谷田貝がなぜ仲介に当たったのか。その事情は明らかでない。ただし、彼が清水徳川家の家臣であり、南畝の弟の島崎金次郎がやはり清水家に仕えていたという事実がある。金次郎が島崎家の養子となつたのは明和末か安永初の頃と推測されており、養父幸蔵が没したのも安永元年ごろとされる（玉林晴朗氏『蜀山人の研究』へ畝傍書房、一九四四年）七〇九―七一〇頁）ので、安永六年時点で金次

郎は島崎家当主として勤務していたはずである。金次郎は宝暦八年生まれで（小林ふみ子氏「南畝の弟―島崎金次郎のこと―」、「日本古典文学会々報」一三六号、二〇〇四年七月）、この年二十歳。また、

南畝の姉が嫁いだ吉見家も清水家に仕えていたから、谷田貝が金次郎達から南畝の噂を聞かして、蓼太に情報を伝えた可能性は十分にある。つまり、蓼太が南畝に序文を依頼するに至る経緯には、まづ清水家関係者の人脈が働いたと考えるべきであつて、そのほうが現実的な解釈といえるのではないか。

むろん、南畝が全くの無名人であれば、蓼太も声をかけなかつたらう。南畝周辺の幕臣達の間では、南畝の才能は相応に知れていたに違いない。しかし、蓼太が自分の句集に漢文序を依頼するとき、南畝の名声に縋つて箔付けを欲したということはなかつたらう。俳壇で十分に名声を博していた蓼太にはそんな必要などなく、むしろ三十一歳も若い南畝に晴れの場を提供するくらいのつもりだったのではないか。谷田貝に的を絞つて清水家と南畝の接点を探ってみると、そのような成立事情が想定されてくる。

その上で、なぜ蓼太が発句ならぬ狂歌を携えたのかも考える必要がある。いうまでもなく、蓼太は狂歌とは基本的に無縁の存在である。その蓼太が敢えて狂歌を詠んだのは、狂歌の名手との噂の南畝に対して、精一杯の挨拶をして見せたところか。相手の土俵に乗つて、謙虚に挨拶をし、相手を褒めて見せる。まさに客人が発句を詠む際の気分である。そう考えると、やはり蓼太の狂歌から

南畝の置かれた状況を読み取るのは難しいといわざるを得ない。

三

次に狂歌の表現について見る。この狂歌が南畝を褒めて見せた内容を持つことは間違いないところであるが、表現の上から一首を虚心に眺めてみると、南畝を直接褒めているのではないことがわかる。「四方に」と「赤らく」とに「四方赤良」が掛けてあるからこそ、狂歌師四方赤良を称揚することになるのである。しかし一首の表現を表向き統御しているのは南畝称揚の論理ではない。「高き名の」狂歌は、そもそも何を表現しており、表現に沿つてどのように解釈すべきなのだろうか。私見では、三句「わき出て」と結句「子どもまでしる」が鍵となる。

「四方にわき出」るのは何かというと、「高き名のひゞき」である。何か、あるいは誰かの高名が評判となつている。その「高き名」をすぐに南畝の名声と結びつけるのがこれまでの常識であるといつてよい。だが、その際、なぜ「わき出づ」という言葉が選択されたのかを考える必要はないのだろうか。「わき出づ」は「湧き出づ」、つまり液体が湧出するの謂と捉えるのが本来の意味に即した解釈である。無用の考証かもしれないが、念のため宇田敏彦氏編『天明五大狂歌集総句索引』（若草書房、一九九六年）を引くと、『狂言鶯蛙集』巻十八「雑体」に、加保茶元成の「伊豆国熱海御湯にまかりて」短歌（一〇六〇）があつて、初句から「わきいづの あたみの御湯に

きてみれば まへははるけき 沖津なみ」と続く例を見る。ここは熱海温泉の湯が湧出することに「伊豆」を掛けていたのであって、「湧き出づ」本来の用法に則っている。狂歌とはいえ、いや狂歌だからこそ、滑稽を担う部分以外の根幹はしっかりと正しい用法に支えられた表現でなければ意味をなさない。ゆえに、「高き名のひゞき」の実態は、明示こそされないが、「わき出て」と縁語関係を結ぶことの出来る液体状のものでなければならぬと考える。それはいうまでもなく、新和泉町の四方屋久兵衛の酒である。

狂号四方赤良のもととなった「四方のあか」が酒なのか赤味噌なのかはなかなか決着のつかない問題である（宇田敏彦氏「四方のあか」考、「歌子」二号、一九九四年三月）が、南畝に限っていえば、彼自身の用例から見て酒の名と受け止めていたと考えてよさそうだ（新大系の中野三敏氏解説五四八頁参照）。もしこの狂歌が第一義的には四方屋の酒を褒める歌であるとしたらどうだろうか。そうだとすれば液体である酒の縁語として「わき出づ」が選ばれるのは極めて自然なのではないか。

もうひとつ、結句の「子どもまでしる」があった。これも南畝の名声を大人だけでなく子どもまで知っていると専ら解されてきた。しかし、考えて見ると、南畝の知名度に関して、なぜ「子どもまで」と強調されなければならないのかわからない。酒の歌とすれば、四方屋の「四方のあか」という酒の評判を大人が知っているのは当然のことだが、酒を飲まないはずの子どもまでが知っているとい

う意味になり、解釈は無理なく出来る。「子ども」「まで」の二語が存在する理由は、この解釈があつて初めて説明できるのではないか。もつといえは、「赤らく」は「赤だ赤だ」を子供が真似をして発音するのを再現したものなのかもしれない。うまい酒を飲んだ親たちの歓声を聞き覚えた子供たちの、文字通り舌足らずの表現なのではないかといえは、あるいは想像に過ぎようか。そこまで考える必要はないにしても、この狂歌の主旨が酒褒めにあるのは間違いない。

何よりも蓼太は「酒一陶をたつさへ」やつて来たのである。狂歌の後に紹介される逸話も、酒好きの南畝に対する蓼太の配慮を語る。『奴胤』のこの条は、蓼太と南畝との交流を、酒に関連付けて述べるといふ方針で統一されている。「高き名の」狂歌は、まずは持参した酒を讃える形を伴って詠まれた。そこに南畝自身を褒める意図がこめられているのはいうまでもない。しかし、最初から人事の要素にばかり着目するのでは、蓼太の工夫を味わうことにつながらない。まして、この狂歌の内容が安永六年当時の南畝の扱われ方をそのまま反映すると見るのは、的外れというべきであろう。

四

一方、蓼太に序文を請われた南畝は、同年六月付けで「蓼太集序」を撰文した。便宜上書き下して掲げる（引用は古典俳文学大系『中興俳諧集』〈集英社、一九七〇年〉に拠り、送り仮名や句読点、濁点

を私に補い、歴史的仮名遣いに統一した。なお、常用漢字・人名漢字に含まれるものはその字体を使用した。

と為す。

安永丁酉夏六月南畝子序

蓼太集序

和歌は国詩なり。変じて連歌と為り、俳諧歌と為る。其れ猶ほ詩変じて騷賦と為り、律絶と為るがごときか。時に汚隆有り。辞に長短有り。俗に正変有り。節に緩急有り。体裁異なると雖も、其の情は一のみ。東都の蓼太、俳諧歌を善くするを以つて世に聞こゆ。門生、崎陽に寓す。蓼太の著はす所の一章を以つて、之を清人程劍南に示す。程、一絶を賦して以つて其の章を写し、且つ手書して以つて遺る。時人、之を艶称す。丁酉の季夏、蓼太、酒を載せて余を牛門に顧る。其の集に序せんことを請ふ。余之と対酌し、頽然として酔ふ。作りて嘆じて曰く、是有るかな。昔、晁卿、唐人と唱酬し、明人、日本風土記を著はして、和歌数篇を載す。然らば則ち彼、我に詩有り、和歌有ることを知る。蓋し未だ連歌有ることを知らざるなり。而るを況や俳諧歌をや。俳諧歌有ることを知る者、乃ち蓼太より始まる。今此の集を觀るに、著作太だ富めり。重ねて以つて清人に示さば、則ち彼の五言長城も、殆んど將に墨守を失せんとす。蓋し我が日出の邦、升平百五十年、煥乎たる文教、海内に洋溢す。此の事小なりと雖も、以つて余波を觀るべし。彼は其の詩を以つてし、我は吾が歌を以つてす。各盈耳と称するのみ。是を序

内容は、大きく分けて、①冒頭から「其の情は一のみ」までの和漢詩歌の比較対照論、②「東都の蓼太」から「之を艶称す」までの程劍南関連の逸話、③「丁酉の季夏」から「墨守を失せんとす」に至る蓼太俳諧への賛辞、④以下最後まで、蓼太句の漢詩訳が日本の俳諧と中国の漢詩に影響を与え、それぞれますます盛んになるであろう事を予祝する結びとからなる。このうち、②の程劍南による蓼太句「五月雨やある夜ひそかに松の月」の漢詩訳については、安永四年の春の出来事で、翌五年の冬に竹語という俳人を介して蓼太の元に文章と一絶が齎されたことがわかっている（中村俊定氏・加藤定彦氏「雪中庵蓼太年譜稿―明和・安永期―」、「連歌俳諧研究」六七号、一九八四年七月）。また、程劍南訳に触発された南畝が『日本風土記』の体裁に習って自分なりの訳を試みたことも、『一話一言』巻二十六や『南畝莠言』の記事に明らかである。蓼太・程劍南・南畝三者三様の表現の比較検討はそれだけでも興味ある問題をほらむと思われるが、今は立ち入らない。なお、③にも言及され、阿倍仲麻呂とともに、日本人が詩歌を詠むことを中国人に知らしめたという『日本風土記』（『全浙兵制』の附録）は、南畝の愛読書であったらしく、隨筆にもたびたび引用している。

さて、この序文において、蓼太はどのような論理で褒め称えられ

ているのだろうか。まず①では、和歌から連歌、そして俳諧が生まれたことを述べ、漢詩の歴史的展開と引き比べつつ、俳諧の「情」が和歌や連歌と共通することを説く。俳諧を和歌や連歌と同列に論じるために俳論で繰り返し取り上げられた主張を掲げて見せている。

②は蓼太の句を清人が評価し、漢詩に訳して自ら書し、それを門人（竹語）に託したというのだから、蓼太はいわば世界的な存在となつたことになり、その紹介だけで十分のはずである。③は、日本人の漢詩や和歌が中国に紹介された先例を述べて、俳諧は蓼太が初めてと言挙げする。『蓼太句集』の所収句がさらに訳されて清人に紹介されれば、漢詩の絶对的な優越性にも動搖をきたすのではないかという趣旨の言葉は、蓼太にとつて最高の褒め言葉である。そして④では、俳諧と漢詩の隆盛に蓼太の果たす役割の大きさを想定して見せた。南畝としては最大限の賛辞を捧げたといえよう。

文章の趣旨を理解するだけであれば、以上でほぼ分析は尽きる。しかし、ここではもう少し表現そのものに目を向けてみたい。すると、何気ない言葉に南畝の文芸観が透けて見えるように思われる。

五

まず南畝は、和歌から連歌、連歌から俳諧という日本の韻文の史的展開に沿って、価値の評価を下していたことが確認できる。その意識が最もよく現れているのが、「然らば則ち彼、我に詩有り、和歌有ることを知る。蓋し未だ連歌有ることを知らざるなり。而るを況

や俳諧歌をや。俳諧歌有ることを知る者、乃ち蓼太より始まる。」の部分である。南畝は、中国人が日本に連歌という韻文があることを知らないこと述べ、「ましてや俳諧のことを知らないのはいうまでもない」と言い切っている。流布の程度、愛好者の数、いずれをとつても当時の連歌は俳諧に比肩すべくもなく、中国人の目に触れる可能性からいつても俳諧のほうが圧倒的に高かった。しかし、南畝の目は、現状の繁栄よりも文芸としての正統性の方に向けられ、俳諧よりも連歌のほうが先に中国に紹介されるべき文芸として位置づけられていた。南畝には別に俳諧を貶める意識など全く無かつたに違いない。和歌の次に連歌を立てるのが完全に常識と化しているため、連歌の下の俳諧という位置づけを、俳諧宗匠蓼太を褒め称える文章にも無意識に織り込んでしまったのであろう。雅俗のあわいに身を置いて縦横の活動を展開することになる南畝の、しかし強固な雅俗峻別の価値観がおのずと発露したところだろうか。

もう一つ、南畝は俳諧を一貫して「俳諧歌」と呼称している。古今集の俳諧歌は俳諧の伝統を論じる際に決まって持ち出され、いわば俳諧の正統性を保証する最大最高の根拠であるが、狂歌にとつても後に重要な拠り所として利用されることになる。鹿部部真顔を中心とした流派の「俳諧歌」を標榜する夥しい撰集の存在は、その典型であろう。そんな俳諧・狂歌双方にとつて大切な用語を、南畝は俳諧の同義語として使った。一つには、文芸の形態としての俳諧を漢文脈の中で表現するに際して、諧謔・滑稽を意味する「俳諧」の

二字のみでは落ち着きが悪いということが考えられるが、それだけではなく、一方で狂歌の正統性を主張するのにも不可欠なはずの「俳諧歌」という重要語を無造作に俳諧に与えたことで、古今集以来の伝統を持つ文芸として狂歌を箔付けするという発想から南畝が完全に自由であることが明らかとなると、逆に俳諧に対しては伝統を体現した「俳諧歌」の語を使用することで、和歌・連歌と真に肩を並べることを切望した俳諧師達の立場を尊重して見せるつもりもあつたとの推測も可能かもしれない。南畝にとつて狂歌はあくまでも当代の遊びなのであり、古今集以来の伝統の裏付けによる格式など全く必要としていなかったが、歌人・連歌師から常に見下げられてきた俳諧師には、古今集以来の伝統こそが支えとなつた。そのあたりを南畝は見抜いていたのかもしれない。同じ「俳諧歌」に淵源を持ち、江戸の地にふさわしい現代詩として共通点も有する俳諧と狂歌であるが、両者のあり方には本質的な違いがあつた。南畝の「蓼太集序」はその点を図らずも炙り出したといえようか。

おわりに

安永五年刊『評判茶臼芸』の「実悪之部」巻軸に配された「俳諧」の評判で、南畝は頭取に、

当時のきゝもの風雅丈、元祖は伊賀の旅芝居より出て、三ヶの津に名をしられたる事、委は七部抄、風俗文選等に見へたり。

夫より弟子筋あまたにわかれ、武玉川の流れの末にいたりて蕉門の灸点を失ひ、つゝあに江戸風当世一流と成

（『全集』第七卷二一〇～二二二頁）

といわせている。巧みに茶化しながらも江戸俳壇の原点を芭蕉に見る南畝の目は、「誠は千三つの万九にて、万九くといへど皆金出して仕廻るゝ仕打」（同二二二頁）を専らとする点取宗匠には厳しいけれども、「江戸風当世一流と成」つた現況をそれとして認めてもいる。生涯を通して蓼太を追慕し続けた南畝であつたが、積極的に蓼太一門に与することはなく、あくまでも門外漢で通した。その程のよい距離感が、俳諧を客観的に鳥瞰する余裕を生んだ。蓼太はしっかりと自分の領分を守りつつ、はるかに若い南畝を引き出すべく、不慣れな狂歌に手を出して見せた。生前の交流は淡いものだったが、二人の交錯した安永六年に成つた「高き名の」狂歌と「蓼太集序」は、世代を越えて互いを尊重する二人の表現者としての面目と思いやりを、短いながらも十分に発揮した作品であつたといえよう。

表現に即して正確に内容が汲み取れたかどうかは心もとないが、所詮文学研究は解釈に尽きると聞き直つて、一つの読みを提示してみた。